

歴史的文化遺産を活用し新たな風景を生み出す内発的地域再生マネジメントに関する研究

－千葉県鴨川市嶺岡牧地域を対象とした実践的研究－

日大生産工(院)○大澤 李奈 日大生産工(学部) 金子 暉
 日大生産工 篠崎 健一

1. 背景

千葉県房総半島南部には嶺岡牧という地域がある。

嶺岡牧とは、鴨川市と南房総市にまたがる嶺岡山のほぼ全域とそれに隣接する柱木山に形成される地域である。かつて関東近郊に存在した千葉県の小金牧と佐倉牧、静岡県県の愛鷹牧とともに嶺岡牧は、全国に4箇所しかない江戸幕府直轄牧の1つである(Fig. 1)。極めて保存状態の良い遺構が残っている。¹⁾ 嶺岡牧には、関連した民具や民俗資料、多数の古文書が保存され、当時の様子が想定できる重要な手がある。また嶺岡牧では、八代将軍徳川吉宗が最高の薬餌といわれていた「醍醐」を国民に広め、人々の寿命を延ばすため白牛を放った。その後、嶺岡牧は日本酪農発祥之地として、地域畜産会社の誕生地、主要製乳業の起源地となり牛乳、乳製品食の源流となった。

これらより、嶺岡牧地域は日本の里山を思わせる地形、豊かな海の幸や農産物溢れる風土、漁業や酪農、農業などの生業の営みが結びついた景観が伝統的に継承されてきた。

嶺岡牧地域では地域住民が中心となり、持続的な文化遺産の再生を足がかりとした地域再生が行われている。嶺岡牧を貴重な歴史文化資源を用いて個性的で魅力的な地域暮らし再編を行うため、市民ワークショップが2006年に行われ、2009年10月には科学的な基礎調査を地域再生マネジメント実証の一部として考古学調査、文書調査、民族調査、生物調査、地球科学調査と総合調査を開始している。以降、他分野にわたる数名の研究者と地域への理解を深め

た数名の嶺岡牧地域において、他分野にわたる数名の研究者と地域への理解を深めた数名の嶺岡牧スチュワード^{*1}やファシリテーター^{*2}といったカタリスト^{*3}の牽引により、スチュワードやファシリテーターといったカタリスト²⁾の索引により、地域住民に嶺岡牧地域の姿、歴史、魅力を伝え、働きかけることで関心や知識を育み、内発的發展を促す地域再生マネジメントが行われている。



Fig. 1 千葉県の江戸幕府直轄牧と嶺岡牧地域
 (日暮, 千葉 (2013) を参考に作成)

*¹ 文化遺産である嶺岡牧及びその関連遺産を持続的に資源化および管理するマネージャー。スチュワードとは、元来「番人」のことで、自主的に町づくりを行う主体のことを意味する。

*² ファシリテーターとは、「促進者」を意味する言葉である。地域再生活動の相互理解を促しながら、取り組みを活性化させる者を指す。

*³ カタリスト(catalyst)とは、「触媒」を意味する言葉であり、嶺岡牧地域では活動を促進させる主体を指す。

Study on Endogenous Regional Revitalization Management creates new
 landscape using historical and cultural resources
 －Practical study on Mineokamakaki area, Kamogawa Chiba Prefecture －
 Rina OSAWA, Hikaru KANEKO and Kenichi SHINOZAKI

表 1 地域再生マネジメントの活動内容

主体	活動内容
地域住民	- 古文書撮影 - 聴いてみよう古文書が語る物語 - 嶺岡牧講演会
酪農のさと	- 嶺岡牧に関する展示 - 展示解説をする企画展, - 嶺岡牧スチュワード養成講座 - 馬頭観音を巡る
嶺岡牧を考へて会	- 嶺岡牧セミナー - 嶺岡牧サロン - 嶺岡牧エクスカージョン - 遺構の除草作業
鴨川味の方舟	- チッコカタメターノ料理作り - 試食会

2. 研究目的

歴史文化資源の活用を目指す嶺岡牧地域で継続されている地域再生マネジメントの実態を把握する。嶺岡牧地域が持つ特長を理解した上で、その課題について整理をしたのち、新たな活動により持続的な文化遺産の活用を行う地域再生に向けた実践計画を構築することを目的とする。

3. 研究方法

筆者は、2022年1月より嶺岡牧地域に足を運び、日常的な歴史的資源の管理活動に加わっている。嶺岡牧地域の地域再生マネジメント活動について理解を深め、現地での活動、地域住民との交流を通じた学びを整理する。学びから得た知見を活かし、持続的な歴史的資源を活用する新たな取り組みを考察し、地域再生マネジメントを促進させる一つとなる実践計画を立てる。

表 2 現地訪問記録

2022年1月19日	石井牧士家訪問	11:00～16:30
2022年2月24日	石井牧士家訪問	11:00～16:30
2022年3月20日	シンポジウム	13:00～17:00
2022年4月15日	嶺岡牧サロン	19:00～21:00
2022年5月15日	馬頭観音を巡る 5	9:00～12:30
2022年5月19日	聴いてみよう古文書が語る物語 4	14:00～16:30
2022年5月20日	ミニ講演会	14:30～15:30
2022年5月20日	2022年度第2回嶺岡牧セミナー	19:00～21:00
2022年6月16日	聴いてみよう古文書が語る物語 5	14:00～16:00
2022年6月19日	嶺岡牧エクスカージョン 小金牧	8:30～20:00
2022年6月26日	第2回嶺岡牧スチュワード講座	10:00～12:30
2022年7月7日	古文書撮影	10:30～17:00
2022年7月10日	馬頭観音を巡る 6	9:00～13:30
2022年7月11日	味の方舟 料理教室	8:45～14:00
2022年7月15日	2022年度第3回嶺岡牧サロン	19:00～21:00
2022年7月24日	第3回嶺岡牧スチュワード講座	10:00～13:00
2022年7月24日	牛花火の復元作業	14:30～17:00
2022年8月2日	酪農のさと展示替え	9:30～17:00
2022年8月3日	馬頭観音調査	8:00～19:00
2022年8月4日	古文書撮影	9:30～17:00
2022年8月8日	味の方舟 料理教室	9:00～15:00
2022年8月19日	2022年度第3回嶺岡牧セミナー	19:00～21:00
2022年8月20日	馬頭観音を巡る 7 の準備	8:30～16:00
2022年8月28日	第4回嶺岡牧スチュワード講座	10:00～12:00
2022年9月1日	古文書撮影	9:30～16:30
2022年9月3日	酪農のさと展示解説	11:00～16:30
2022年9月11日	馬頭観音を巡る 7	9:00～12:30
2022年9月11日	味の方舟 料理教室 前日準備	14:00～15:00
2022年9月12日	味の方舟 料理教室	8:45～14:00
2022年9月15日	聴いてみよう古文書が語る物語 8	14:00～16:00
2022年9月19日	嶺岡牧エクスカージョン	9:00～17:00
2022年9月23日	【古民家ろくすけの蔵でアート展】 「平群の酪農の歴史とそれにまつわる話」	14:30～15:30
2022年9月24日	第5回嶺岡牧スチュワード講座	10:00～12:00
2022年9月24日	試食会開催の打ち合わせ	14:00～15:00
2022年9月25日	嶺岡牧講演会	13:30～15:30
2022年10月6日	古文書撮影会	9:30～16:30
2022年10月13日	千葉自然学校打ち合わせ	13:00～14:00

4. 嶺岡牧地域再生に向けた取り組み

私たちとともに嶺岡牧の地域再生に向けて活動する嶺岡牧スチュワードという人がある。

2020年7月より千葉県酪農のさと(以下、酪農のさと)で研究者によって開催されている「嶺岡牧スチュワード講座」がある。年間を通して全12回の講義に出席し、認定試験に合格したのちスチュワードとしての資格を取得することができる。スチュワードには、バachelラー、マイスター、ドクトルの3つの階級があり、2021年度は、マイスターの資格を取得した3名がドクトルコース、新たに1名がバachelラーコースを受講している(Fig. 2)。

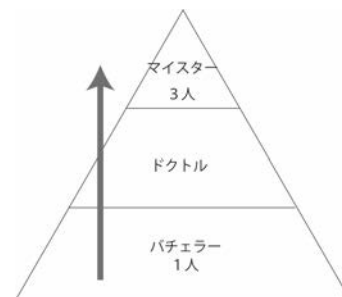


Fig. 2 嶺岡牧スチュワードの階級

スチュワードの養成では、千葉県酪農のさとの講演やパネル展の展示解説、特別展の展示替え、馬頭観音の洗浄など、座学以外の指導も行われている。馬捕場や野間土手などの山の草木に埋もれている遺構の除草作業牧士住宅に保存されている民具や古文書の記録作成などの文化遺産の保存活用に向けた活動を通して、歴史的文化遺産とその保存活用への理解を深める実践的な学びの場となっている。

筆者もスチュワードや地域住民と、嶺岡牧での地域再生マネジメントの助けとなるよう活動している。例えば、酪農のさとにて展示される牛花火を復原する作業である。牛花火とは、酪農と花火が融合して生まれた平群地域ならではの酪農文化である。作業した牛花火は、すでに打ち上げられたものを、地域住民と協力して復原した(Fig. 3)。



Fig. 3 牛花火の復原をするスチュワードと参加者
右は展示している牛花火 (2022年10月 筆者撮影)

5. 取り組みから得た気づき

5.1. 嶺岡牧を知って活用を考える会

「嶺岡牧を知って活用を考える会」が開催している、嶺岡牧サロンがある。嶺岡牧を知って考える会とは、嶺岡牧遺産群について学び、それを持続的に活用して地域を再生する方法を見出すため、2018年に設立した。嶺岡牧サロンでは、歴史的文化資源を活用した地域住民との交流促進をねらいとした文化観光推進事業について学ぶ。そこではスチュワードのデータベース化事業がある、歴史文化資源による交流促進として文化観光推進事業について学び、文化資源活用に向けて、調査研究、データベース化、ガイド養成などの事業があり、現在行われているスチュワード養成の重要性を理解できる。

5.2. 嶺岡牧エクスカーショ

「嶺岡牧エクスカーショ」においては、製乳業関連史跡を巡ることで、嶺岡牧地域の文化遺産は広範囲に点在しており、整備の行き届かない史跡にはサインなどの標識が少なく、目印となるものが存在しないため、初めてその地を訪れる人にとってはそこに何があったのかわ

からない状態が続いていることが判明している。Fig. 4に示す左図は、1990年頃の製乳業が盛んに行われていた明治製菓の勝山工場であり、2022年現在の様子と比較すると似たような景観であり、製乳所の建物は壊されてしまったが、当時の面影を感じることができた。

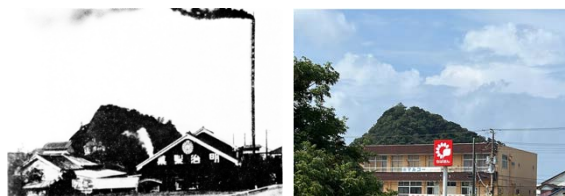


Fig. 4 エクスカーショで巡った製乳業関連史跡
(2022年9月 筆者撮影)

5.3. 馬頭観音を巡る

酪農のさと主催の「馬頭観音を巡る」においては、馬頭観音、牛頭観音は民間信仰として人々に親しまれている。暮らしとも密接な関わりを持つ歴史的資源であることを体感している。

5.4. プロジェクト鴨川味の方舟

「プロジェクト鴨川味の方舟」では、実際に牛の初乳を酪農家から受け取り、参加者とファシリテーターとの連携を取りながら、チッコカタメターノを使用した料理を作った。チッコカタメターノとは、売れない初乳を「捨てるのは勿体ないから」と、固めて食べるようになった地域固有の食文化である。味わうとともに人々の交流を図ることができ、嶺岡牧地域で生まれ育った人々にとって、馴染み深い味で、なくてはならない地域の食文化であることが理解できる。

一方で、現在チッコカタメターノの資源化に向けて、地域の企業と連携した試食会も行われている。例えば、鴨川市にあるホテル鴨川館にて開催されるイベントで、料理長が考えた献立でチッコカタメターノを用いた料理を食べることができる。まだチッコカタメターノを食べたことがない人でも味わうことができる機会となっている。将来的に地域ブランドとして商品化ができるよう現在計画が進んでいる。

チッコカタメターノを資源化するにあたり、乳及び乳製品の成分規格等に関する省令(以下「乳等省令」と呼ぶ)の規制がある中でいかに地域食生活につなげるか、どのように顕在資源とするかが課題となっている。



Fig. 5 嶺岡牧で行われている地域再生マネジメント

6. 今後の課題

嶺岡牧は、多面的な魅力に溢れている。しかし嶺岡牧地域が誇る巨大資源の価値は認識されず、未だに活用が行き届いていない資源がある。³⁾ 歴史的文化遺産として、まだ活用することができる段階にない整備中であるものや、引き続き調査が必要な資源などが多く存在している。地域再生マネジメントでの活動を通じた学びや気づきを暮らしづくりの糧として、歴史今日的課題となっている。⁴⁾

その中でも、食文化に関する地域住民の活動として、地域の味であるチッコカタメターノを伝承する地域再生マネジメントの計画が必要であると考え。2019年にみんなみの里にて地域住民を対象に、グランドマザーズディというイベントが開催された。おばあちゃんによる孫たちへの食文化の継承と食育及び地域活性化を目的とした活動である。地域交流と高齢者の健康維持の両面を兼ね備えたイベントを開催することにより、高齢者の健康維持法の一つと

して、嶺岡牧地域で行われている。実施回数はまだ一度だけであるため、新たな地域再生マネジメントの方法としてグランドマザーズディを普及する必要があると考える。

エクスカーショにおいては、製乳業関連史跡に関する目印がないことから、史跡の看板となるサインを計画し、広く人々に認知してもらい、そこに史跡があることを示す必要があることがわかる。

7. 今後の展望

チッコカタメターノ食の地域資源化に向けて、地域住民との交流、企業との連携が重要となってくることなど、スチュワードと行動をとともにすることでの気づきを得ることができた。そのシステムの構築のためにも、嶺岡牧スチュワードの存在が不可欠である。今後の展望として、知識と経験のあるスチュワードを増やすことで、嶺岡牧地域をよく知る案内人として観光客に向けたプログラムを作成することが検討されている。ツーリズムの面でもスチュワードの役割は大きく、まだサービスとして確立されていない活動は多くあるため、サービスについてシステムを構築するためにも、嶺岡牧スチュワードの存在に焦点を当てた活動を普及し、活性化させる方法を検討する必要がある。そしてスチュワードだけではなく、地域住民を巻き込んだ持続的な歴史的文化遺産の活用による地域再生システムを構築することが課題として挙げられる。今後は、筆者自身がスチュワード活動の一環として、嶺岡牧地域に関する食文化、酪農、製乳業の景観を捉え、歴史的文化資源のデータ収集、食文化景観再生に向けた前段階の実証検証をすることで、本格的な活用に向けた取り組みの計画と効果を検討する。

参考文献

- 1) 日暮晃一、文化財をいかに未来へ伝えるか。
- 2) 青木更吉：嶺岡牧を歩く、崙書房出版、2005
- 3) 日暮晃一、千葉いずみ：徳川吉宗再興の江戸幕府直轄牧、千葉県酪農のさと/嶺岡牧研究所、2013
- 4) 日暮晃一：日本のエンクロージャームーブメント跡「嶺岡牧」、シンポジウム、隠れた日本の宝「嶺岡牧」で地域消滅を回避する、2022年3月20日
- 5)